

みじめおばさん

ドイツ

昔むかし、あるところに、まずしいおばあさんがいました。おばあさんは、みじめおばさんと呼ばれていて、年とった犬といっしょに暮らしていました。

おばあさんの財産といえば、庭にはえている一本のナシの木だけでした。ところが、秋になってナシが実ってくると、毎日、村のいたずらっ子たちがやってきて、おいしそうにじゅくした実をみんなとっていってしまいました。そんなことが毎年つづきました。

ある日のこと、おじいさんがひとり、みじめおばさんの家の戸をたたきました。

「わたしは腹がへって死にそうだ。どうか、食べ物をめぐんでおくれ」

みじめおばさんは、

「まあ、それはお気のどくに。でも、どうしましょう。うちには、黒パンが半分しかないんですよ。でも、これでいいんなら、食べてくださいな」といいました。おじいさんは、パンを受けとって、

「あんたは、ほんとうにやさしい心の持ち主だね。お礼に、願いごとをひとつかなえてあげよう」といいました。おばあさんは、考えてからいいました。

「そうね。わたしの願いごとはただひとつ。わたしのナシの木にさわったものは、みんなびったり木にくっついて、わたしがはなしてやるまでにげられないようにしてほしいの。みんなでナシの実をぬすんでしまって、それはひどいんですよ」

おじいさんは、

「では、望みどおりにしてあげよう」といって、どこかへ行ってしまいました。

つぎの日、みじめおばさんはナシの木を見にいきました。すると、木には、男の子や女の子がたくさんくっついてぶら下がっていました。子どもをひきはなそうとしたお母さんたちまでぶら下がっていました。お母さんたちをたすけようとしたお父さんたちまでぶら下がっていました。鳥や犬もぶら下がっています。ナシどろぼうをつかまえに来たおまわりさんまでぶら下がっているではありませんか。

みじめおばさんは、お腹をかかえて大笑いしました。

それから一年のあいだ、子どもや親たちはナシの木にぶら下がったままでした。みんな、もう、ナシの実をぬすむなんてまっぴらだと思いました。一年たつと、みじめおばさんはみんなを木からはなしてやりました。

長い長い年月がたったある日のこと、みじめおぼさんの家の戸をたたく者がありました。

「おはいり」と、みじめおぼさんは返事をしました。入ってきたのは、死神でした。死神はいいました。

「これこれおぼあさん。おまえとおまえの犬はもうたつぷり生きてだろう。わたしはおまえたちをむかえに来たのだよ」

みじめおぼさんは答えました。

「あんたにつれて行かれるのもしかたがないだろうね。わたしももう歳だからね。でも、うちの中をかたづけていく前に、ちよっと手伝ってほしいことがあるんだよ。あそこのナシの木に実がたくさんなってるだろう。あの実をとつてくれないかい。あれは世界じゅうのどこのナシの実よりおいしいんだよ。あんなおいしいナシの実をほうっていくのは、もったいないと思わないかい」

そういわれると、死神はナシの実を食べてみたくなりました。そこで、

「それもそうだなあ」といって、ナシの木に近寄り、実をひとつとろうとしました。そのとたん、死神のごつごつした骨のような手が、木にぴったりくっついてとれなくなっていました。死神は、木にぶら下がってしまいました。

「そうらごらん、あんたはその木にぶら下がったまま、ひからびるがいいよ」と、みじめおぼさんはいいました。

さて、それから世の中はどうなったと思いますか。

もうだれも死なくなつたのです。水の中に落ちてても、おぼれて死ぬことはありません。ビールをいっぱい積んだ馬車にひかれても、ぜんぜん痛くありません。首を切っても生きています。

死神は、そうしてまるまる十年間、夏も冬も、風のふく日もあらしの日も、木にぶら下がっていました。けれどもそのうち、みじめおぼさんは、死神が気のどくになって、「もしあんたが、わたしうちの犬が好きなら生きられるように約束してくれたら、木からはなしてやってもいいよ」といいました。

死神は約束しました。

みじめおぼさんは、証^{しょうこ}拠として、その約束を紙に書かせてから、死神をはなしてやりました。

そういうわけで、人間はまた死ぬようになりました。でも、みじめおばさんとおばさんの犬だけは、この世がつづくかぎり元気で生きているということです。

資料『世界のメルヒェン図書館1』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

村上郁 再話